

## 大井町立相和小学校

研究テーマ：質の高い授業の創造

～児童一人一人が自ら問いを見出し、学び合いをとおして深める授業～

### 1、実践の目的

本校の児童は、全国学力・学習状況調査や生活アンケートの結果から、自己肯定感や学びに対する意欲が高い傾向にある。しかし、基礎的・基本的な知識・技能の習得については課題が見られる。指導の工夫や家庭との連携による家庭学習の充実を図ってきたが、改善策を検討していく必要があると考えた。

よって、今後の研究については個の学びの充実を図るとともに、より主体的に学び合うことをとおして、児童が「自ら授業を創りあげる」という意識を継続してもてるようにしていきたいと考えた。

今年度は、昨年度の課題として挙げられていた「問い」をテーマに研究を進めていく。児童が見出す問いは、主体的で意欲あふれる学び合いにつながり、思考を深めることになるので、指導者から提供された「めあて」や「問題」を解決するために見出した疑問を「問い」として共有していく。

また、学びを深めるための根幹となる知識・技能については、授業中の帯時間や朝のチャレンジタイムの活用、学年の発達段階を考慮した系統性のある家庭学習の取組を推進していく。

以上のことをとおして、児童が主体的な学習者となるような授業を創りあげていきたい。

また、今年度の研究は、2年計画の1年目として考え、取り組む。1年目は、自ら「問いを見出す」ための工夫について研究することに力を入れていく。来年度は、「学び合いをとおして深める」という部分の研究を進める計画である。

### 2、実践の内容

#### (1) 問いの共通理解

年度当初、「問い」、「めあて」、「問題」というそれぞれの言葉の捉えを職員だけでなく、児童とも確認した。問いをもつことを価値あるものと定めたことで、学校全体で同じ方向を向いて研究を進めることができた。問いをもたせるためにどうしたらよいかを考え、児童主体の授業を

意識した。児童にとっても自分たちの問いであるからこそ、解決したい、分かってほしいという気持ち



が自然とでてきて、学び合いへとつながる様子が見られた。

#### (2) 異学年交流

考えが固定化したり広がったりしにくいという小規模校特有の課題を解決するために、異学年との交流を大切にしてきた。異学年と関わり合いながら学ぶことで、様々な価値観に触れることにつながった。「家庭学習ノート」の交流では、上級生のノートを見て家庭学習でどのような取組を

しているのか学んだり、上級生は下級生に見せるノートを意識して学習に取り組んだり、教えることでさらに学習へ前向きになったりする姿が見られた。



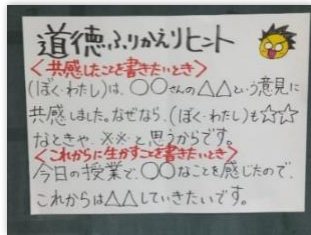
「学び合いタイム」では、縦割り班で同じ場所で自主学習を行った。わからないところを自然に聞いたり、教えたり、早く終わった子に上級生が問題を作ったりする姿が見られた。静かな環境で集中して行えたことも、児童にとっては喜びの一つになった。

「算数の合同学習」では、5、6年生で児童が苦手とする「割合」の授業を行った。5年生にとっては、6年生から学ぶことができ、6年生にとっても復習の場となり、お互いによい時間をもつことができた。

### (3) 個に応じた支援

小規模校の特性を生かし、児童一人ひとりの教育的ニーズを見つけて支援に役立っている。授業の初めに学習の流れを掲示することや、授業の様子や授業後の振り返りから児童一人ひとりの思考を捉えて、次の授業に生かした。児童のニーズに合った具体物やヒントカードを用意する工夫も行った。

研究授業後はインタビュータイムを行い、児童一人ひとりの理解の深まりや満足感を確認し、その後の研究協議や授業に役立った。



### (4) 校内研究

校内研究の協議のもち方を工夫した。今年度は、研究協議の方法を司会担当の職員が考えた。授業者と相談し、毎回変えたことで、新鮮な気持ちで臨むことができた。また、協議後には、協議での学びを振り返り、次の日からどのように生かすかを紙に書いて掲示したことで、向かう方向がはっきりした。

## 3、実践の成果

今年度は、「問いをもたせる」ということにテーマを絞ったことで、職員だけでなく、児童にも同じ方向に向かって授業を創ろうという主体的な姿勢が見えた。問いをもつことで自然と「解決したい」「分かりたい」という働きが生まれ、児童同士が関わり合

いながら解決に向かう様子が見られた。問いをもち、主体的に学び合おうとする姿は算数・道徳だけでなく、その他の教科でも多く見られるようになった。

小規模校であることで、一人ひとりをよく見ることができるといえるが、考えが固定化してしまったり偏ってしまったりすることが以前から課題として挙がっていた。そのため、今年度は異学年と合同で学ぶ機会を設定した。まずは、ノート交流として、家庭学習で使っている自主学習ノートを掲示する機会を設けた。お互いにノートを見て工夫したところを紹介することで、学習の仕方やノートの使い方を知る機会をもてた。ノート交流後には、ノートの使い方を工夫する姿が見られたり、学習の取り組み方の幅が広がったりしてきた。また、同じ時間、同じ空間で学習する「学び合いタイム」という取組を行った。縦割り班で異学年と一緒に学習するので、下級生がわからないところを上級生に聞くことが容易にできて、「教える」という行為が上級生にとっても大きな学びの場となっていた。何より多くの児童が「楽しかった」「集中できた」「またやってみよう」と感じられたことが大きな成果といえる。その他、算数や道徳を二学年が一緒に行うことにも挑戦した。学び合いタイム同様、様々な考えに触れたため、上級生にとっても下級生にとっても刺激があり、学びを広げるよい機会をつくることができた。

## 4、今後の展開

来年度は、問いを大切にしつつ「学びを深める」ということを重視して研究を進めていく。今年度取り組んだ、異学年で学び合う機会を計画的に設定し、より様々な考えに触れながら自らの考えとつなぎ合わせ、アウトプットにつなげて学びを深められるようにしていくことが来年度の課題となる。小規模校であることでフットワークよく動けることを利点とし、柔軟な発想で児童と共に授業を創りあげていく。